

自閉症児者へのプレイセラピーに関する一考察 — 3つの初回面接事例より —

飯塚一裕 (愛知教育大学 障害児教育講座)

要約

本稿では、自閉症児者へプレイセラピーを用いて関わった3つの事例を取り上げ、彼らとの関わりの糸口を見つけ展開していくための試みと、乳幼児期の自閉症児への関わりの在り方について検討を行った。初回面接に焦点を当てた考察から、特異な行動傾向に意識してあえて巻き込まれ本質的なところをある程度理解した上で、あえて巻き込まれないことによって、部分的にでも発達を促すかわりを行っていくことの重要性を指摘した。また、乳幼児期の自閉症児との関わりから、共同注意のレベルのように発達の基盤となる点に着目する必要性について論じた。

キーワード：自閉症 発達支援 プレイセラピー

1. 問題と目的

自閉症児者において、対人的相互交渉の困難さに代表される社会性の障害は、幼少期から青年期以降も残存するため、発達支援を行う際の中心的課題の1つとして考えられている。Trevorthenら(2005)は、自閉症の社会性障害の原因は、どのようにしたら他の人々と共同関係を築けるのかを理解する上での独特な躰きを反映しており、自閉症の子どもたちにとって最大の困難は、双方向的な、模倣による、遊び心のある共同的な対人交渉であると述べている。そしてPrizantら(1999)は、自閉症に対する介入のアプローチは、自閉症児に顕著に見られる中核的特性を直接扱うべきであり、環境における社会的合図への注目、自発的コミュニケーションの意図、模倣及び同年齢の子どもや大人との対人的交流などを促進するための計画案が含まれていなければならないと指摘している。

自閉症児者の社会性を促す支援は多種多様であり、多くの臨床実践がこれまで報告されてきた。プレイセラピーもその中の一つであり、支援する者の立場や理論によって異なる部分もあるが、遊

びを通して彼らのコミュニケーション能力を促進していくことには変わりはないであろう。このプレイセラピーという枠組みの中では遊びを媒介として関わっていくことになるが、臨床現場では、セラピストからの働きかけに全く応じることなく、感覚的な遊びに没頭するといったことがしばしば見受けられる。自閉症児者へ発達支援を行おうとする者が困難に感じることには、彼らへの「関わりにくさ」や、彼らの見せる行動の「わかりにくさ」等がある。そして、支援する者にとっては、どのように関わりの糸口を見つけていくかという点がまず重要になってくるものと思われる。

そうした自閉症児者への関わりについて、遠藤・伊藤(2007)は「あえて巻き込まれることと巻き込むこと」の重要性を指摘している。彼らは、自閉症の子どもは発達早期、知覚的な好みやバイアスとして、通常の赤ちゃんにとってはごく当たり前のように魅力的な人の顔や目や声、あるいは様々な感情表出等の社会的刺激をあまり好まず、むしろそれを避け、特定の物理的刺激により注意を向ける傾向を有しているのではないかと述べている。遠藤らが考えるように、自閉症児者が

社会的な刺激に注意を向けることが「できない」のではなく、あまり注意を向け「ようとしなない」ということが、自閉症児が見せる「視線が合いにくい」「他者からの働きかけに応じない」「独り遊びに従事する」といった特徴の背景に存在しているのかもしれない。その子がより良くコミュニケーションや学習を行えるように手助けをしたいと思う人にとってまず第1の課題は、その子との交渉可能な窓口、理解の窓口を見つけることである（Trevvarthenら、2005）ことを考えると、遠藤らが心構えの一つとして考えているように、私たちが暗黙裡に有している発達や子育ての常識や信念等を自覚した上でいったん脇に置き、彼らにあえて徹底的に巻き込まれてみる必要があるのではないだろうか。その中で彼らの特性を見極め、独自の行動傾向が見えてきた先に、あえて巻き込まれないことによって、部分的にでも発達を促すかわりを行っていくことが大きな意味を持つものと考えられる。

筆者は平成21年4月より、愛知教育大学発達支援相談室（以下相談室：平成21年9月迄の名称は障害児治療教育センター）での臨床活動に従事してきた。その中で、言語表出が乏しく他者との関わりが困難な自閉症児者数名とのプレイセラピーの機会を得ることができた。「他者との関わりが難しい」特徴を持った彼らとのプレイセラピーを通して、自閉症児者と関わる際にセラピストが留意すべき点について考察を行うことを本研究の目的とする。

2. 方法

本研究では、相談室で筆者が扱った3事例を取り上げ、その関わりの中から見出される点について考察を行う。

3. 事例

以下では3つの事例について、初回面接の様子を報告する。なお、対象児の概要については、紙面の都合上、成育歴や家族構成、来談経路等は割愛し、行動特徴など必要最小限の情報のみを記すこととする。

また事例の中では、筆者であるセラピストをTh.、また対象児のA、B、CそれぞれをCl.と記す。

1) 事例1 Aくん

3歳の男子。診断名は自閉症。外国人の両親を持つ。言葉はいくつかの単語が出ているのみである。母親以外の他者と一緒に遊ぶことはほとんどなく、また母親に対してもCl.から関わっていくことは少ない。指さしの理解なども難しく、他者へ要求をする場合はクレーン行動が多い。Cl.のセラピーの担当者は筆者以外の学生であったが、セラピーを開始する前に筆者が一度Cl.と関わるようになった。

玄関でTh.が挨拶をするが、Cl.から返事をすることはない。ただし、Th.の顔は見ている。母親から挨拶をするように促されると、Cl.は何事か言っているようであるが、Th.には聞き取れなかった。

プレイルームに移動後、Cl.は色々な遊具を見ていたが、箱の中から玩具の剣を持ち出してそれを眺めていた。Th.も剣を持ってCl.の正面に立つと、Cl.が剣を振りながらTh.に向かってくるため、Th.も剣を持って応戦する。このチャンバラ遊びでは、Cl.がやみくもに剣を振ってくるが、Th.を狙って剣を振ってくるような感じではなく、Th.の顔を見るようなこともない。Th.は暫くそれに合わせていたが、途中で「やられたー」とTh.が倒れこむと、Cl.はとても嬉しそうな表情を見せる。Th.が起き上がると、再びチャンバラを要求するような仕草を見せていた。その後は、チャンバラでTh.が負けるということを繰り返す。数回繰り返した後、Th.がその場から逃げだすと、Cl.は笑顔で声を出しながら追いかけてくる。この追いかけてことチャンバラという遊びの中では、Th.と一緒に遊んでいるという感じを持つことができていた。

トランポリンでは、下半身だけを動かすような感じで跳んでいる。回数を多く跳ぶことができていたため、Th.と母親が「すごいねー」と褒めると嬉しそうにしていた。Th.がCl.の手を取って一緒に跳ぶと、この時も声をあげて喜んでいて。身体接触を嫌がるような素振りは見せない。Th.がトランポリンから降りて母親と話していると、Cl.がトランポリンの上から何事かを喋りながら手まねきのようなジェスチャーをしてくる。この時の言葉をTh.は理解できなかったが、母親によれば外国語で「おいで」ということであった。なお、母親はCl.が自分から他人を呼ぶことは母親

以外ではほとんどないと語り、この出来事にはとても驚いているようであった。

2) 事例2 Bさん

高校生の女子。診断名は自閉症。言葉でのやりとりは難しく、言語表出はほとんど見られない。筆者が関わるまでもに相談室を数年に渡って利用しており、筆者が引き継ぐこととなった。ただし、諸般の事情により2回目以降は他セラピストが担当することになったため、筆者とは一度きりの関わりとなった。

玄関で簡単に自己紹介を行うと、最初は顔を見ずにおじぎをする。母親から促され、2回目に挨拶をする時にはTh.の顔を見ており、視線も合う。挨拶の後はトイレに入り、その後まっすぐにプレイルームに向かう。

入室後すぐに卓球台に向かい、台の上にあぐらをかいて座る。持参した鞆から折り紙の本と折り紙を取り出し、折り紙の本を広げて素早く鳥のようなものを折り始めるが、本は見えていないようであった。Th.がCl.と向かい合う状態で立って見ていると、Cl.から折り紙を手渡してくれるが、Th.はどのように折ったらよいか分からずに戸惑ってしまう。すると、Cl.はTh.の折り紙を奪い取って自分で鳥を折っていく。その後Th.が折り方を覚え慣れてくると、二人で一枚ずつ折っていく作業を暫くの間繰り返す。最初はなんとかCl.に合わせるので精一杯だったが、余裕が出てきたところで、Th.はゆっくりと折るようになる。すると、Cl.はそんなTh.を待ちきれないといった様子で見ているが、Th.が折り終えるまで待ってくれていた。Th.が折り終えたものをCl.が手に取り、折り方を確認して、(Cl.から見て)不備があれば折り直していた。全て折り終えると、ゴミ箱に捨ててしまう。Th.が2つを手にとって「これ先生にちょうだい」と言ってみるが、ジェスチャーで捨てるように指示してくる。鳥の後は折り紙で風船作りを行い、それが終わるとまた全てゴミ箱に捨ててしまった。

折り紙での風船作りが終わると、鞆からゴム風船を3つ出してきて、Cl.が風船を膨らませた後にTh.に手渡し、結んで風船を完成させるように指示する。風船が完成した後は、風船パレーのような遊びをしばらくの間行う。この遊びの中では、Cl.に笑顔も見られていた。途中でTh.が「こ

の色がいい」と使う風船を変えるように提案するが、拒否することなく受け入れてくれる。風船遊びの後はCl.からトランポリンに上り、笑顔で跳んでいた。その後Th.もトランポリンに上り、一緒に跳んでいると笑顔のCl.とTh.の視線が合うこともあった。

母親や親面接担当者からの話によると、今までほとんど同じ遊びを行っていたとのこと。たまにバドミントンをすることもあったそうである。

3) 事例3 Cくん

中学生の男子。診断名は自閉症。Cl.からの有意味語は見られず、言葉でのやりとりは非常に難しい。感覚的な遊びに固執することが多く見られる。

初対面のTh.に対して、緊張しているような様子は見せない。母親から促されて、お辞儀をする。プレイルームに入室後、入り口付近のソファの上に横になり、ソファの下を覗き込んでいた。数名の大人と子どもがプレイ中であり、そちらの方が気になるのか、視線を送ることが多い。Th.の声かけに対しては、あまり反応を示さなかった。

おもむろに卓球台の方へ移動し、床の上にあったマグネットのおえかきボードを手取る。Cl.から書こうという仕草を見せないため、Th.が絵や形を書くと、それをCl.が上から塗りつぶすということを暫く繰り返す。その途中で「すごいね」「じょうず」などTh.が褒めていると、たまにCl.がTh.の方を見ることもあった。その後、Th.が紙とクレヨンを出し、「おえかきしようか」と声かけするとクレヨンを手取るが、自分ではかこうとせずに、クレヨンをTh.の方に渡して行く。Th.が絵をかくと、その上を強い筆圧で塗りつぶしてしまう。その後、塗りつぶした絵をちぎり、側にばらまいてしまった。

時折奇声のような声をあげることもあり、部屋の中をうろうろ歩き回るが、特定の遊具で遊ぶこともない。終了時刻になり、Th.が腕時計を指さしながら「終わりの時間です」と言うので、特に抵抗することもなく、出口に向かう。出口のドアを出てからは、走って母親のもとに向かっていった。

4. 考察

以下では、3つの事例に基づいた関わりの糸口を見つけ、それを展開していくための試みと、乳

幼児期の自閉症児への関わりの在り方について考察を行う。

1) 関わりの糸口を見つけ展開していくための試み

初回面接において筆者が心がけたのは、当然のことではあるが、まず彼らとの関わりの糸口を見つけるということであった。Aの場合は「玩具の剣」、Bの場合は「折り紙」というように、それぞれが従事している遊び（遊具）にこちらが合わせていくということを行った。

まず事例1に関して、最初にAが遊具の剣を手を取った時、Aには筆者を相手にしたチャンバラを行おうという意思はなかったのかもしれない。しかし、筆者もAと同じ剣を手にとって彼の視野に入っていくことで、偶然ではあるが、チャンバラという遊びが開始されることとなった。その後暫く二人の間でチャンバラが続いたが、その中でAは笑顔を見せることもなく、筆者はただお互いに剣を振りあっているだけという印象を持っていた。その状況を変えてみよう、筆者は倒れこむという展開を行ったところ、その行動によってAの思わぬ反応を引き出すことができた。そして追いかけてこも含めた、お互いに楽しい遊びを続けることが可能となり、その後の場面でも筆者を意識した行動を見せていた。

また事例2においては、折り紙を折るというBの遊びに筆者が付き合うところから関わりを始めていった。最初はBのペース、特に素早く折り紙を折り続けるという行動に、何とか合わせようという一心で関わっていくと、とりあえず二人でひたすら折り紙を折り続けるという状況を生み出すことができた。そしてその関わりが安定してきたところで、筆者はあえてゆっくりと折り紙を折るという、Bにとっては思い通りにいかない行動を見せていった。その際には少しイライラしたような様子も見受けられたが、プレイ全般を通してBが不安定になることはなかったように感じられた。また、Bの遊びの文脈の中で筆者が提案することに対して、それを受け入れてくれることも見られ、トランポリンの場面で一緒に跳んでいると笑顔のCl.とTh.の視線が合うこともあった。

遠藤・伊藤(2007)が述べるように、自閉症児へ関わる際に我々がまずやるべきことは、特異な行動傾向に意識して「あえて」巻き込まれ、その

原理や法則性あるいは自閉症児なりの理由等を努めて理解するということであろう。そして、自閉症児の行動傾向の本質的なところをある程度理解した上で、あえて巻き込まれずに仕掛け、今度はこちらの方に少しでも歩み寄ってきてもらわなくてはならない。そうした関わりを試みていくことが、彼らの社会性を促すことに繋がっていくものと思われる。

A、Bとの関わりの中では、多少なりとも一緒に遊ぶことができたような感じを持っていたが、Cの場合は自ら遊びを開始することはなく、感覚的な活動に固執していた。筆者はこの初回面接では「うまく関わるができなかった」と感じており、Cとの関わりの糸口を見つけることが難しいという印象を持った。もちろん、初回のセッションで必ずしも関わりの糸口が見つかるわけではないが、関わる側が、物事に無関心に見える自閉症児を、あたかも人とのつき合いで情動的に感じることはないかのような、行動や言葉に託されているメッセージを読み取れないかのように見なしてかからないことが肝要であり(Trevarthenら, 2005)、プレイセラピーを行っていく上でも重要な点であると思われる。滝川(2004)が指摘するように、関わりの糸口を見つけるためには、自閉症児がふっと見せるかすかな接近のサインへのめざとさが必要となるのであろう。

従来の研究並びに臨床実践からは、自閉症児者がコミュニケーション意図等の心的世界をもつ存在として他者を理解することに困難を抱えていることが明らかになっているが、彼らは他者の心の存在の理解に障害を持っているとしても、発達の中でコミュニケーション行動を獲得していくことが指摘されてきた。支援を行う際には彼らとの関係性を築いていくことが必要不可欠であるが、1回だけのセッションでそれを行うのは不可能と言わざるを得ない。特にCのようなケースでは関係性の変化といった視点から事例を検討していくことが重要であるが、その点については今後の課題としたい。

2) 乳幼児期の自閉症児に対する関わり

本研究ではそれぞれの子どもの1セッションのみを取り上げているため、発達的な視点を踏まえた詳細な検討を行うことは難しいが、3歳のAとのセッションから、乳幼児期の自閉症児に対す

る関わりの方について考察を行いたい。

既述のように、自閉症児者において社会性の障害はその中核的特性と考えられており、発達援助を行っていく上での中心的課題の一つである。特に乳幼児期における他者との社会的相互作用の問題は重要であり、その中でも共同注意 (Joint Attention) の視点は乳幼児の社会的・認知的発達に大きな役割を担っている。なお、この共同注意は広義には「他者と注意を共有すること」とされ、人間のコミュニケーション発達の基盤とも考えられている概念である。近年、自閉症研究の領域において「心の理論」に関連した研究が活発に展開されてきたが、その心の理論に先立つ共同注意は、言語獲得や社会的相互作用のスキル獲得に必要な発達の前身であるという考え方があり (大神, 2002)、自閉症は心の理論の欠損だけでなく、それ以前の発達段階である共同注意に障害があると従来の研究で指摘されている (Sigman and Kasari, 1995)。そして、自閉症の共同注意行動の障害は自閉症児と他者の二者間での注意の共有の困難さが一次的な障害である可能性が指摘されており (Leekam & Moore, 2001)、自閉症児が人を安全な存在として理解できるようにすることが、二者間、三者間での注意共有を促す上でも療育上重要となってくる (別府, 2005)。すなわち、身近な大人を安全基地として捉える、愛着の発達に対する援助が共同注意形成においてもきわめて重要とされるのである。

事例1で取り上げたAは、人との関わりが乏しく、指さし理解なども難しいという特性を持っており、言わば共同注意の原初的段階 (対面的共同注意がみられる二項関係) における障害 (伊藤, 2006) を抱えていた可能性が考えられる。Aに対して筆者はなるべく侵入的な関わりを避け、楽しい雰囲気を作りながら徐々に遊びを展開させるように心がけていた。1つのセッションの中だけではあるが、次第に筆者を意識するような行動が見られるようになり、そこから他者への要求行動も現れるようになっていた。彼らの社会性の障害に対してアプローチする際には、こうした発達の基盤となる点に着目する必要があると考えられる。

なお、乳幼児期の自閉症児への支援方法に関して、伊藤 (2006) は「情動的交流遊び」と命名するギッコンバッタン、くすぐり遊びなどの身体遊び等を自閉症に対する支援プログラムの中の重要

な課題として位置づけている。これらの遊びの中では子どもに笑顔が見られることが多いが、情動共有の成立を基盤としたコミュニケーションの発展をめざした支援方法としてその有効性が検証されている (三宅・伊藤, 2002)。こうした視点も踏まえて、乳幼児期の自閉症児への支援の在り方について検討を行うことが今後の課題であろう。

付記

本論文の作成にあたり、事例の使用を快く承諾して頂いた、Aくん、Bさん、Cくんのご家族の皆様にご心よりお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 別府 哲(2005) 自閉症児の“目”：視線理解と共同注意のもうひとつのかたち 遠藤利彦(編)読む目・読まれる目：視線理解の進化と発達の心理学 東京大学出版会, 179-199.
- 遠藤利彦・伊藤 匡(2007)自閉症児の発達を促す環境づくりーあえて巻き込まれることと巻き込まれないこと 発達No.112, ミネルヴァ書房, 77-88.
- 伊藤良子(2006) 自閉症スペクトラム障害における情動共有とコミュニケーション 自閉症スペクトラム研究, 5, 9-16.
- Leekam, S. & Moore, C. (2001) The development of attention in children with autism. J. A. Bureck, T. Charman, Yirmiya, & P. R. Zelazo (eds.), The Development of autism: Perspectives from theory and research (pp. 105-129), Lawrence Erlbaum.
- 三宅康将・伊藤良子(2002) 発達障害児のコミュニケーション指導における情動的交流遊びの役割 特殊教育学研究, 39(5), 1-8.
- 大神英裕(2002) 共同注意行動の発達の起源 九州大学心理学研究, 3, 29-39.
- Prizant, B. M. & Rubin, E. (1999) Contemporary issues in interventions for autism spectrum disorders: A commentary. Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps, 24, 199-208.
- Sigman, M. & Kasari, C. (1995) 自閉症児と健常児の様々な文脈における共同注意 Moore, C. & Dunham, P. J. (編) ジョイント・アテンション：心の起源とその発達を探

- る(大神英裕 監訳), pp.179-193.
- 滝川一廣(2004) 自閉症児の遊戯療法入門— 学生のために— 治療教育学研究, 24, 21-43.
- Trevarthen, C., Aitken, K., Papoudi, D. & Robarts, J. (2005) 自閉症の子どもたち： 間主観性の発達心理学からのアプローチ 中野茂・伊藤良子・近藤清美(監訳) ミネルヴァ書房